

NSAIDs不耐症/アスピリン喘息 (AERD) における病態解明の進歩と臨床的側面

谷口正実[†]第72回国立病院総合医学会
(2018年11月9日 於 神戸)

IRYO Vol. 74 No. 10 (428-436) 2020

要旨

- ・ NSAIDs過敏症は、非免疫学機序のNSAIDs不耐症と単一のNSAIDに対するアレルギーなどに分類される。
- ・ 不耐症は気道（喘息+鼻茸）型と皮膚（蕁麻疹/血管浮腫）型があり、ともに臨床現場でよく経験される。一方、NSAIDアレルギーは、連用による感作で生じるまれな病態である。
- ・ 気道型不耐症は、アスピリン喘息（AERD）と称され、成人喘息の5-10%を占め、重症喘息の中で最も重要かつ高頻度である。
- ・ AERDは、好酸球性鼻副鼻腔炎、NSAIDs過敏、システニルロイコトリエン過剰産生を特徴とするが、いまだ発症原因は不明である。
- ・ 通常のアレルギー検査では同定できず、診断のゴールドスタンダードは、アスピリン内服試験である。
- ・ COX-1 阻害作用を有するすべてのNSAIDs（貼付薬などあらゆる剤型を含む）で重篤な気道狭窄を生じやすいため、それらは禁忌である。一方、COX-1 阻害作用がほとんどないセレコキシブやアセトアミノフェンは安全に使用できる。
- ・ AERDの病態解明や治療において、国立病院機構相模原病院臨床研究センターは多くの世界的な業績をあげた。

キーワード アスピリン喘息 (AERD), NSAIDs不耐症

はじめに

本稿では、臨床現場で遭遇することが多いNSAIDs不耐症、とくにその気道型であるアスピリン喘息 (NSAIDs過敏喘息, AERD: Aspirin Exacerbated Respiratory Disease) の病態解明の進歩と臨床的側面、実際の対応法を中心に述べる。

NSAIDs (非ステロイド性抗炎症薬, 解熱鎮痛薬) で増悪するアレルギー疾患 (表1)

NSAID (Non-Steroidal Anti-Inflammatory Drug) で増悪するアレルギー疾患は、4つに分類できる。まず、すべてのCOX-1 阻害薬に対し過敏反応を呈する (抗原抗体反応ではなく、薬理学的変調現象である) NSAIDs不耐症が挙げられる。これには気管

国立病院機構相模原病院 臨床研究センター (現所属: 湘南鎌倉総合病院免疫・アレルギーセンター) [†] 医師

著者連絡先: 谷口正実 国立病院機構相模原病院 臨床研究センター事務室

〒252-0392 神奈川県相模原市南区桜台18-1

e-mail: masamit11111@yahoo.co.jp

(2019年11月26日受付, 2020年9月11日受理)

Recent Advances in Pathophysiology and Clinical Aspects of NSAIDs Intolerance / Aspirin-exacerbated Respiratory Disease (AERD)

Masami Taniguchi, NHO Sagamihara National Hospital

(Received Nov. 26, Accepted Sep. 11, 2020)

Key Words: aspirin-exacerbated respiratory disease, NSAIDs intolerance,